

中島・田中報告へのコメント

桜井 英治

中島圭一氏「撰銭再考」

撰銭令に関しては、最近、高木久史氏がこれを飢饉や軍事行動に関連した食料需給策とみる見解を提起し、黒田基樹氏もこれを支持する発言をおこなっているが、中島報告は『勝山記（妙法寺記・常在寺衆中記）』の撰銭関連記事の分析にもとづいて、これを批判し、撰銭現象はあくまでも貨幣システム自体に内在する要因から説明されるべきことを主張。難解な『勝山記』の撰銭関連記事を丹念に読みこむことによって、撰銭の発生条件や規模を明らかにしたことも貴重な成果である。

田中浩司氏「16世紀の京都における貨幣の様相—大徳寺関係文書を中心に—」

『大徳寺文書』および『真珠庵文書』は16世紀の帳簿類を多数含むことから、当該期京都の禅宗寺院経済・都市経済研究に好個の素材を提供している。田中報告はこれらの帳簿類の分析から16世紀京都における貨幣使用の実態解明をめざしたもので、銭の区別立て等に関して法（撰銭令）と実態の“乖離”を炙り出した意義は大きい。また、16世紀後半には銭遣い→米遣い→銀遣いという主要貨幣の交代がおこるが、大徳寺の帳簿類ではその交代はかならずしも截然としておらず、銭・米・銀の長い併用期を経ながら漸進的に移行してゆくようである。田中報告はその併用の実態を腑分けすることによって、銀使用がどの用途からまず浸透していったか、また米使用がどの用途において長く残存したかなど、貨幣交代のミクロなプロセスを明らかにしている。他方、16世紀は、銭建てで一定だった中世の賃金が、ふたたび古代と同じく米建てで一定になる転換期でもあり、工匠の作料に関する分析は、そのような視点からもじつに興味深い。

中島報告についての論点

- ・ 拙稿「中世における物価の特性と消費者行動」（『国立歴史民俗博物館研究報告』113集、2004年）でも触れたが、『勝山記』にみえる穀物価格の水準は高すぎる。枘の容量の違いに起因する可能性もあるが、当該地域では15世紀段階からかなり質の悪い低銭が通用銭となっていた可能性も否定できない。中島氏は『勝山記』にみえる穀物価格を精銭建てと考えているのか。いずれにせよ戦国期当該地域における通用銭の実体が問題となる。
- ・ 撰銭令を食料需給策とみる高木説が成り立たないという批判は納得できるが、それでは撰銭令の真の目的は何か。食料需給策とまではいえないにしても、物価政策とみる高木氏の見解は妥当なのではないか。
- ・ 撰銭は物価にどのような影響を及ぼしたのか（上昇要因か、下落要因か）。京都の撰銭令に頻出する「事を撰銭二よせ、諸商買物かうちき（高直）になすへからさる事」（永禄

12年2月28日織田信長撰銭定書案、他)という条項では、撰銭を物価上昇要因と扱っているが、『勝山記』では、逆に撰銭は物価下落要因としてあらわれる。この背反した現象をどう説明するか。理論的には、(撰銭令による使用強制等のために)低銭が排除されず善銭とともに流通しつづけるばあいには流通銭の総体的貶質化によって物価上昇がおこると考えられる(さらに銭の選別にともなう取引コストの高騰も物価上昇の要因となりうる)。逆に、撰銭によって低銭が排除され、流通から完全に引き上げられたばあいには銭貨流通量が減って物価下落がおこると説明できる。撰銭令があまり実効性のない法であったとすれば、より広汎にみられたのは後者か。

- ・ 中島氏は「銭飢渴」について「流通銭貨総量の減少ではなく、精銭流通の不足」であると述べているが、ここでいう「流通銭貨」には撰銭によって排除された低銭も含まれているのか。素朴な疑問だが、撰銭によって流通から引き上げられた低銭は完全に廃棄されてしまうのか、それとも退蔵されてふたたび流通界にもどってくる可能性があるのか。この点をはっきりしないと「銭飢渴」の評価も確定しないように思われる。

田中報告についての論点

- ・ 文亀元年(1500)の宗栢松源院祠堂銭京上注進状では、「貫別加洪武五十文充」のように「組成主義」(銭の区別立てが発生し、混用比率等が定められるが、悪銭の減価使用はまだ認めておらず、1枚=1文の等価原則を堅持)がとられていたが、永正7年(1510)4月7日一休宗純三十三回忌納下帳になると、精銭とは異なる価値水準をもつ「悪銭」が分離し、「個体選別主義」(1枚=1文の等価原則が放棄され、銭種ごとに異なる相場が成立)に移行。幕府や戦国大名の撰銭令は、永禄12年(1569)の織田信長撰銭令がはじめて打歩を認めるまでは「組成主義」を貫いているので、かなり早い段階から法と実態が乖離していたことになる。撰銭令は実効性の乏しい非現実的な法だったのか。にもかかわらず繰り返し発布されたのはなぜか。また田中氏は、16世紀半ばまでは悪銭が混入しても、その影響は小さかったとみているが、これは、悪銭の流通量自体が少なかったという理解か。
- ・ 奉加や賽銭といったヴォランティアな収入への依存が大きい寺社経済は、受領する貨幣の種類を制御しにくく、受動的になりやすい(一大宗教センターである伊勢も他地域にくらべ悪銭の流通量が多かった可能性が高い)。大徳寺の帳簿類にみられる銭・米・銀の併用状況はこのような寺社経済の特殊性に起因するのか、それとも当該期京都の一般的な貨幣動向を反映しているのか。

以上、両報告ともに、奇しくも撰銭および撰銭令の本質に迫る内容となっている。これを機会に、撰銭問題について徹底的に議論してみたいかがだろうか。